米山梅吉記念館
館報
2019 春号 Vol.33

THE YONEYAMA UMEKICHI MEMORIAL HALL REPORT

Rotary 公益財団法人 米山梅吉記念館

1929（昭和4）年落成の三井本館。この建物の反対側に三井銀行が入っている。この本館内で米山梅吉は三井信託株式会社取締役社長と三井銀行取締役を兼務していた。

三井信託株式会社取締役社長の米山梅吉が使用していた部屋の様子。机、椅子、金庫等は現在米山梅吉記念館が保管展示している。

米山さんの著書は、それぞれ時代の特色もあって興味深く、教えられるものや、楽しめるものが数々ありますが、これらを通じて感ぜられることは、いつも国家、社会が念頭にあって、常に創意と進歩を目指し、他方絶えず豊かな文藻を楽しんで居られて、まさに国士であり、仁者であると同時に、文雅の人であった。（佐藤嘉一郎『米山梅吉選集』序文より）

米山梅吉が1927（昭和2）年に出版した『銀行行餘録』の中に「信用とは」の一文がある。

「信用とは道徳上の頗る深長なる意味を有し、個人若しくは団体が殆ど無限に社会より寄せられたる信望を謂う。或いは、以って積極的資本とも謂い得る。これを狭義に解して商業に定義を求めれば、信用とは或担保を提供して、又はこれ無くして予め設定し得たる資本の融通力を指すものである。（中略）安全と利益とは初めより信用成立の道理であって、安全ならずして信用起こらず、利益を無視して信用せず」。

『銀行行餘録』は本文396ページ、明治30年から大正14年までの30年間の回顧録であり、この中に人口に膾炙されることになる「新隠居論」が入っている。

『銀行行餘録』を上梓した頃の米山は三井信託株式会社の社長である。信託業は預けた人のために預かったものを管理運営して利益を還元する奉仕であると信じて、また自身の新隠居論の実践として取組んだのだろう。銀行人財界人として充実した55歳からの10年間であった。

「米山梅吉の著作をじかに読むシリーズ〈銀行行餘録「銀行の取引台を顧みて…苦き経験」を本文に掲載しています〉

お知らせ　米山梅吉記念館

春季例祭

多くの皆様のご来館をお待ち申し上げております。

［日時］2019年4月20日（土）午後2時～　●開会前墓参
［場所］米山梅吉記念館ホール

●講演（2時30分～）

［講師］村上（むらかみ） 昇男（のりお）氏
伊豆湯ヶ島温泉 落合楼 村上 主人
株式会社おちあいろう　社長

［演題］『青山学院
緑岡初等学校と落合楼』

●アトラクション
民芸衆団 奏鳴曲（ソナタ）
数々のタイトルを持っている、子供達のチームです。

●懇親会
ロビーにて講師、演奏者を囲んでの懇親会
多くの皆様のご参加をお待ちしております。

登録料無料

共にお祝いしよう！
参加ご登録のお誘い

米山梅吉記念館
創立50周年記念式典

日時　2019年9月14日（土）14：00開会（受付13：00より）
会場　東レ総合研修センター（三島市）および米山梅吉記念館
［記念式典］14：00　［記念講演他］15：00～17：30

①［演題］米山梅吉と奨学会（仮題）
［講師］林　曼麗 氏
財団法人国家文化芸術基金会董事長
元 米山記念奨学生・元 台湾故宮博物館館長

②映像で綴る米山梅吉の足跡
「米山梅吉の跫音」

③ひとり語り
「魁の人 米山梅吉」女優・大塚良重
［定員］600人　［登録料］10,000円

林　曼麗 氏

東レ総合研修センター

大塚 良重 氏

エクスカーション
①三島名物“うなぎ”を食し、記念式典会場に向かう日帰りツアー
②式典に参加し、米山ゆかりの伊豆湯ヶ島“落合楼 村上”に宿泊、三島の“うなぎ”と周辺観光一泊ツアー

※交通　新幹線三島駅・東レ会場・記念館へのシャトルバスを運行

米山梅吉記念館のご案内

新幹線三島駅よりタクシー5分
東名沼津ICより15分

［開館時間］午前10時～午後4時
［休館日］●月曜日
●12月28日～1月4日
●整理のための休館日（5月・8月の特定日）

米山梅吉記念館 館報
Vol.33 春号

発行日／平成31年3月22日
発行者／公益財団法人 米山梅吉記念館　理事長　積 惟貞
〒411-0941静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1　TEL（055）986-2946　FAX（055）989-5101
URL http://yoneyama-umekichi.jp/　E-mail yumh@ai.tnc.ne.jp

秋季例祭
報告

米山梅吉記念館　積　惟貞　理事長

RI第2620地区
星野喜忠ガバナー

講師　櫻井 祥行氏

東京ロータリークラブ会長　山本恭人様

会場の様子

アンサンブルFEP（フエップ）
美しい音色の演奏を聴かせていただきました

日時　平成30年9月15日（土）
場所　米山梅吉記念館
●開会前墓参
●講演（2時30分～）
［ 講師 ］　静岡県立韮山高等学校長
　　櫻井 祥行氏
［ 演題 ］　『伊豆と世界史』
　　-維新から150年～、米騒動から100年-
●アトラクション
　アンサンブルFEP（フェップ）
　　フルート･二胡･ピアノ･歌
●懇親会

秋季例祭
講　演

伊豆と世界史
～明治維新から150年、米騒動から100年～

講 師
静岡県立韮山高等学校長　**櫻井 祥行 氏**

ペリー来航と伊豆

今年は明治維新から150年、米騒動から100年の年に当たります。と同時にこのロータリークラブ創設者の米山梅吉氏の生誕150年にも当たります。ということは米山梅吉氏は明治元年生まれということになります。

明治維新は薩長同盟が成立したから成就したとか、江戸幕府の地位低下とか言われますが、全てはペリー来航が起点であり、同じくプチャーチン来航にあるといえます。両名とも伊豆半島に立ち寄り交渉し、伊豆は幕末維新に大いに関係した地であることを銘記していただきたく思います。

幕府は既にオランダ風説書を通して、ペリー来航の情報をつかんでいました。1848年にマニフェストデスティニーを掲げて西進してカリフォルニア金鉱を発掘し、太平洋上の捕鯨に乗り出した時期でありました。フィルモア大統領の親書を持ったペリーは正規の長崎での交渉を無視して、1853年江戸湾に現れます。そこにはアヘン戦争を通じてアジア進出には砲艦外交で対応すべしとの決意をみてとれます。

マシュー・ペリー

エフィム・プチャーチン

時の老中首座であった阿部正弘は英明高き人物でしたが、アメリカへの対応を広く人々から意見を求める公議輿論を行ったがために、幕府権威を落とすきっかけともなりました。

その頃、1か月遅れて長崎に入港したのがロシアのプチャーチンです。プチャーチンはペリーよりも早く本国を出発していたのですが、クリミア戦争が勃発した時期とも重なり敵国のイギリスやフランスの動向を気にしながら航海せざるをえなかったためでした。

ここで韮山代官江川太郎左衛門、我々は坦庵と呼んでおりますが、江川坦庵の存在がクローズアップされます。彼は当初から海防策を説いて再三幕府に反射炉築造や江戸湾防備の建言書を提出しておりましたが、幕府に無視されていました。なぜ彼がこのような発想をしていたかといえば、1792年にロシアから大黒屋光太夫がラクスマンとともに帰国してきた際に、老中松平定信は沿岸防備のため伊豆半島の巡見で出かけます。この時随行したのが坦庵の父親の江川英毅で、この頃から伊豆半島を含めた海岸防備の必要性を聞いて育っていたためでした。

実は坦庵は水野忠邦が天保の改革を推進していた時には、海防掛に就任していて幕閣の一人として活躍しておりました。水野の失脚と合わせて坦庵も罷免され、伊豆韮山に帰って地方の一代官となりましたが、地元で韮山塾を立ち上げて砲術教授をしていました。これは高島秋帆から学んだ西洋砲術の授業や訓練を行うもので、最初の塾生が佐久間象山でした。ここには薩長の関係者もかなり来ていて、薩摩の黒田清隆や大山巌、長州の桂小五郎や井上馨が関係しております。兵糧のためのパン食を取り入れ、オランダ語を邦訳して今日の教練で使われる「気を付け、礼」「回れ右」といった鋭音号令を生み出しました。

阿部正弘は坦庵を勘定吟味役に取りたて、品川台場築造と反射炉築造を命じます。満を期しての幕閣参政の到来でした。品川台場築造の際には任侠の大場久八が多くの人足を手配して幕府を助けますが、彼の子分が清水次郎長になります。その一方ではペリーの蒸気船を目にして、水戸の徳川斉昭の意見を入れて大型船の建造を許可します。これがその後のヘダ号造船に繋がっていきます。

ペリーは幕府との約束で翌年改めて来航する旨を伝えて帰国しますが、次の来航は新年早々となり、幕府

江川太郎左衛門

韮山反射炉

は日米和親条約を結ぶこととなります。ペリーはさらに下田で追加条約を結びますが、この時船を漕いで密航を企画したのが吉田松陰です。案外知られていないこととして、ペリーは本国に帰国して歓迎を受けますが、4年後には亡くなっております。

1858年には既に来航していたハリスとの間で日米修好通商条約が結ばれます。日本にとっては不平等条約ということでこの時の交渉人はあまり知られておりませんが、岩瀬忠震と井上清直です。後者は勘定奉行川路聖謨の実弟になりますが、両名とも相当レベルの高い交渉で、あらんかぎりの知恵を出して条約交渉をしたようで、後世言われるようなものではなかったようです。この時の大老が井伊直弼で、彼が朝廷（孝明天皇）の勅許を無視して条約したことで反発を受けたことから反対者を次々に処罰しました。これが安政の大獄です。

しかしこれをやりすぎたために、1860年桜田門外の変で井伊は殺害されました。旧暦3月3日のこの日は雪が降っておりましたが、まさに幕府瓦解はこの時に始まりました。

プチャーチンの開けた扉

プチャーチンは当初長崎に入港しましたが、交渉の場は下田に移されました。ところが嘉永7年11月4日、新暦でいいますと1854年12月23日に安政東海地震に巻き込まれます。東日本大震災並みの規模で、彼の乗ってきたディアナ号が大きく損傷します。ペリーの乗ってきた船の2艦は蒸気船でしたが、ディアナ号は帆走船ですので注意してください。

損傷した船を戸田村に曳航していたのですが、富士沖で沈没してしまいます。仕方ありませんので新たな建造するほかありません。ここに日本で最初の洋式船建造と相成るわけですが、実は16世紀後半に徳川家康の知己となった三浦按針（ウィリアム・アダムズ）も伊東の大川河口で洋式船を建造しておりますので、正式に言えば日本で2番目です。

プチャーチンの乗組員500人ほどが戸田村で居住し、ヘダ号が完成するとプチャーチンたち50人ほどが先に本国に帰ります。残された450人がアメリカ船とドイツ船に乗り込んで帰国しますが、ここでもまたクリミア戦争の代理戦争となってドイツ船が拿捕されます。その中に実は日本人が紛れておりまして、橘耕齋という人物で、彼が船中で漢文を理解するゴシケビッチとの間で日露辞典を作るのです。耕齋は維新後もロシアに残り、岩倉具視が訪欧した際に出会い、本国に帰国するよう言われたと言います。

戸田港

ヘダ号造船と並行して長崎海軍伝習所がオランダの尽力で開設されます。ここに江川家家臣たちが大挙して学びに行きます。ここでの練習船が咸臨丸で、1860年に日米修好通商条約の批准のためにアメリカへ行く時の船となりました。この船は勝海舟をはじめ福沢諭吉も乗り込み、異国の地を見て大きく影響されていきます。勝海舟はこの後1864年に神戸海軍操練所を幕府主導で開設し、坂本龍馬が影響を受けていきます。

プチャーチンについてですが、安政東海地震にもめげずしっかり日露和親条約を結び、さらに日露修好通商条約を調印します。本国に帰ると教育大臣、つまり文部科学大臣となり功成り名を遂げていきます。その娘オリガ・プチャーチンは父死後1887年に再び戸田を訪れ、父が世話になったお礼ということで100ルーブル寄附します。このお金の一部を造艦記念碑建設に使おうとした矢先の1891年に大津事件が起きて日本でニコライ2世が遭難したため、しばらく据え置きという事態が生じました（大正12年に建立）。

造艦記念碑

そして幕末期に箱館でロシア正教を布教していたニコライは一時本国に帰国し、プチャーチンに無心します。つまり資金集めをします。そして明治時代になって再び来日して神田にニコライ堂を建設してロシア正教布教に乗り出していきました。この時伊豆関係者が多く洗礼を受けました。ニコライはその後も伊豆箱根鉄道を利用して明治時代後期は修善寺や江間を訪れたといいます。修善寺には立派なロシア正教教会が建てられております。

ロシア正教教会

そしてプチャーチン宅にお世話になっていた日本人もおりました。彼の名前は市川文吉と言います。彼は幕末期にロシア留学生として来て以来ずっとロシアに住んでおりました。その後は榎本武揚の通訳をしたりしますが、晩年は伊東で暮らしました。

プチャーチンの開けた扉により、伊豆は幕末明治とロシアとかなり関係が深かったことがわかると思います。

米騒動とシベリア出兵

明治維新がペリーやプチャーチンと大きな関係をもってきたことがおわかりになったかと思いますが、同時に伊豆がその舞台として大きな役割をはたしてきたことも事実です。

今年は米騒動が起きて100年になりますが、米騒動にも伊豆と少々関係があります。特にこの時期は第一次世界大戦がありましたので、これが日本にもたらした影響も考えねばならないでしょう。第一次世界大戦はヨーロッパが戦場のイメージが強いのですが、このためにヨーロッパの乳製品が輸入できなくなりました。国内ではこのため民間会社が動き、森永乳業は今の三島二日町駅の近くに工場を建てました。今日の森永製菓です。

そして当時流行性感冒が流行りますが、これも中立国だったスペインの名をもらってスペイン風邪と命名しました。今日のインフルエンザのことです。第一次世界大戦終結を早めたのもスペイン風邪が理由と言われております。他にも毒ガスが利用された最初の戦争ということで、他国では理科教育が進み、戦争のために体づくりということで日本でも体操教練が盛んになったと言われております。

この大戦中ロシアでは、ロシア革命が起り皇帝ニコライ2世は銃殺刑となり、新たにレーニンらによるソビエト連邦が成立します。この時に革命が他国に波及しないように関係国はシベリア出兵をします。米騒動はこのための米価格の騰貴が予想されたため、富山の主婦たちが騒動を起こしたのです。越中女一揆とはこのことを意味します。

実はこの時の首相が寺内正毅です。長州藩出身で山縣有朋の子分として出世していった人物ですが、この寺内正毅が伊豆、特に韮山反射炉と大変深い関係にあります。と言うのは、明治期の韮山反射炉は利用されず荒れ放題の状態だったと言います。ところが日露戦争に日本が勝ってから、改めて韮山反射炉建設の評価が高まり、保存運動が起きました。この時に韮山反射炉保護に動いたのが時の陸軍大臣であった寺内正毅でした。今も韮山反射炉横に建てられている反射炉碑には、その当時の様子が刻まれています。

寺内正毅は江川坦庵公55回忌の記念祭として開催された韮山高校講堂での式典に招かれ、ここで演説をしております。寺内は既に首相在職中に体調不良を訴えており、退陣した翌年に亡くなります。寺内の後任の首相は平民宰相ともてはやされた原敬です。

寺内正毅首相

伊豆での米騒動は大規模なものはありませんでしたが、関係はしていたわけで、明治維新も米騒動も伊豆半島は歴史の舞台から欠かすことのできない場所であったことはおわかりになっていただけたかと思います。

米山梅吉の事績を辿って

山田 珠子（佐倉RC）

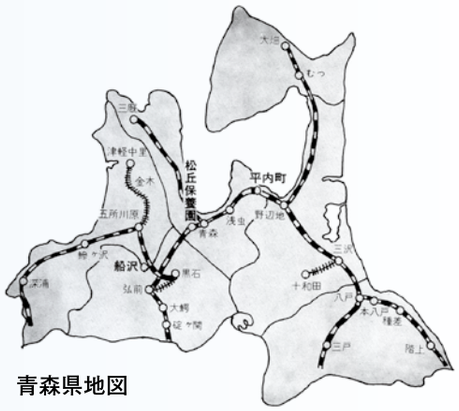
波おだやかな陸奥湾は暮れなずみ、雲間に見えるトキ色（淡紅色）の空が美しい。刻々と変わりゆく暮色を眺めながら、訪れたばかりの西平内村（現平内町）のこと、松丘保養園のこと、そして米山梅吉その人について思いを巡らせていた。

ロータリアンである以上、日本のロータリークラブ創設者として、また50年以上も続く米山記念奨学制度ゆかりの人として米山梅吉の名前を知らない人は少ないだろう。しかし、彼の人となりや遺した事績、アメリカ発祥のロータリークラブを何故日本に創るに至ったのかなどをよく知る人はそう多くはないのでは、と思っていた。私もまたその一人であった。幸運なことに、この秋そのごく一端に、直に触れる機会が与えられたのでその概略を記してみたい。

2018年9月28日、私たち佐倉ロータリークラブの有志10名は、特急、新幹線を乗り継いで青森へと向った。所要時間はそれでも五時間。そう簡単に足を運べる所ではない。折角のこの機会を実りあるものにすべく、事前の資料集めや調べに取りかかった。数年前、当クラブが米山梅吉記念館に訪問した際に購入した2，3の関連書は手許にあるものの、それでは足りない。市内の図書館3館にも満足なものはなかった。そこで頼ったのが米山梅吉記念館の市川さん。すぐさま付箋付きで関連記事掲載の館報数冊と貴重な『米山梅吉翁と青森県』まで送って下さった。

新青森駅では、青森ロータリークラブがご紹介くださったマイクロバスがすでに待っていた。最初の訪問先は、国立療養所松丘保養園である。川西園長をはじめ医師たちににこやかに迎えられて、一行は社会交流会館へと歩を進めた。今年一月に竣工したばかりという会館には青森特産のひば材の香りと木の温もりが溢れ、二面の広いガラス窓（二重）からは秋晴れの日差しが燦々と降り注いでいた。

園長先生から概況などのご説明を受けた。ピーク時の昭和33年には950床だったが、現在の入所者は72名。平均年齢は85. 9歳。平均在園期間は60. 8年間。特効薬プロミンの普及によりハンセン病そのものは治癒しても、その後遺症ゆえに世間一般からの差別と人権無視が続いて、社会復帰もままならない。そのうち高齢化と不自由度が進み、介護を要する人たちが増加の一途を辿り、その対応や施設のあり方など諸々の問題を抱えているとのことだった。更には、109年もの長い歴史の中で、再度の大火に見舞われたが、米山梅吉が采配を振る三井報恩会などからの多大な援助によって、施設は充実し、敷地も東京ドーム5個分にまで拡大されたこと。将来は、この地を市民憩いの森にしたいと入所者一同が希っていることなどを、淡々と語っておられたが、内に秘めた信念と高熱は、余人には計りしれないものがあると拝察した。



青森県地図

併設の展示コーナーは、ハンセン病中心のデータや写真などからスタート。同行した米山奨学生のチン・ルイさんは、現在千葉大学薬学部博士課程で先端創薬科を専攻しているだけに、プロミンの分子構造が、最近目にした論文の構造図に途中までよく似ていると興奮気味だった。彼女のテーマは遺伝子を使ったガン治療薬の開発であるが、「プロミンが多くの苦しむ人々を救ったように頑張りたい」と後日の例会で話していた。会員たちは、思い思いに展示物に見入ったり、作品コーナーの冊子類を手にしていた。

窓外に目を転ずれば、雲間に聳える八甲田の山脈が緑なす裾野を拡げている。この壮大な風景の中で、園の皆さまと地域の人たちが集まって語り合い、笑い合って賑やかで心愉しいひとときを過ごされますようにと祈りつつ、納骨堂に向った。広い敷地内には居住棟などの建物が点在し、その前園には皆さまご丹精の花々が咲き乱れ、青森ロータリーが毎年植樹しておられる桜の樹々がしっかりと根を張っていた。

カトリック教会を始め、プロテスタントや天理教などの教会群が立ち並び、神聖な雰囲気に包まれる。苦悩や不安、底知れぬ寂しさや孤独感などから救い、慰め、悟り、愛…を求めてこれらの教会に足を運んでは祈りを捧げたのであろう。やがて、紅葉にはまだ早い楓の大木の下に静かに佇む納骨堂が現れた。そこには、これまでの入所者の8割、1142柱が眠っているという。中には未感染児童やこの世に生を享けることなき愛の結晶も含まれていると聞き、傷む心を抑えつつそっとお花を手向け、お線香を供えた。園側ご用意のお線香を会員も次々に供え、合掌する鎮魂のときであった。

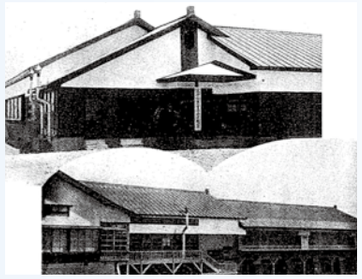
松丘訪問の最後にサプライズが待っていた。川西園長のお取り計らいで、つい10日前に100歳になられたばかりの元患者さんからお話を聞かせて頂けるという。静まりかえった居住棟の1室のベッドに横たわるその方は、色白でつややかなお肌の持ち主。澄んだお声とはっきりした口調で語って下さった。「私は13歳の時福島からたった一人でここにやってきました。母とは亡くなる前に会うことが出来ました。“振り返り手をふりあげつつ帰りゆく母よ妹よ秋ひかり道“（元患者N氏の短歌より）いろいろ苦労もありましたが、今が一番幸せです。毎日を感謝しながら一日でも長生きしたいです。」長い間、人間としての尊厳を傷つけられながらも生き抜いて、100歳を迎えられた方の超然たるご心境に襟を正す思いだった。

宿泊先のホテルでは、青森ロータリークラブの木村元会長と竹内会員がすでに待っておられた。慌ただしい名刺交換の後、各自は荷物を部屋に置いて取って返し再びバスに。お二人のご案内で、旧西平内村へとひた走った。車内では木村氏が西平内村と米山梅吉との関係などを話され、現地到着後も熱弁は続いた。この村は夏に吹く寒冷北東風ヤマセによる冷害、凶作、口減らしのための婦女子の身売り、貧困と無知からくる争いの連続で、日本一の悪村、難村と言われた。この疲弊した村に救いの手を差し延べたのが米山梅吉理事長の三井報恩会だった。先ず、この村を特定振興村に指定し、1934年（昭和9）から農村経済の立て直しに取りかかった。資金援助は無論のこと、すぐれた指導員を派遣して、精神面、教育、生活改善面などでさまざまな事業を県当局ともタイアップしながら展開した。青森県は養殖ホタテの生産高日本一であるが、それはこの過程の中で始まったという。

苦節6年、窮乏に喘ぐ村は見事に立ち直って、平和で豊かな村へと変貌を遂げた。これを記念して建立されたのが「西平内村復興記念碑」。復興事業の中核

をなした「村民の家」の跡地に建つこの石碑は米山梅吉自身の揮毫になる雄渾な筆致を刻んだ、高さ5㍍ほどの花崗石製の堂々たるものであった。私たち一行は眼前の碑を仰ぎ見、刻一刻と日が暮れる中で台座の文字を手探りしながら米山の遺徳を偲んだのであった。

今回の旅で訪れたのは、いずれも三井報恩会の事績のほんの一端である。その創立は1934年。日本最大の三井財閥が3000万円（平成6年時で800～900億円に相当するとの記述あり）を寄附して立上げた社会事業・文化振興などの助成のための財団である。初代理事長は米山梅吉。初代から勤めていた三井信託取締役後社長10年の節目を迎えていたが、三井報恩会設立と同時に職を辞して転身した。米山66歳の時である。


昭和10年・三井報恩会寄附により落成の救癩寮

20歳で渡米し、28歳まで働きながら学び、大学で勉強した彼はアメリカ文化に身近にふれ、同時に人生の師本多庸一と出会い、キリスト教にも深い造詣をもった。帰国して三井銀行に入行した後は、その経歴、能力、人間性を買われて、日本を代表する財界人らと度々海外視察に同行している。その中で彼は、日本での本格的な信託会社設立の事前調査をしており、それが日本初の本格的な信託会社、三井信託の設立となる。また、本務外のことでは、当時のアメリカではロックフェラーやカーネギーなどの大富豪が財団を設立して、社会事業や文化活動を広く、強力に支援・助成する活動が始まっていて、それを目の当たりにした。そのことが、彼の後半生を左右する三井報恩会に関わる礎を形成したと思われる。更には多忙な出張中、アメリカ中部のダラスに飛び、そこでのロータリークラブの例会出席。そこで得た体験が1920年の日本最初のロータリークラブの設立となって結実する。

現役時代の46歳にして彼は「事業に成功したり勢いを得た者は後進に早く道を譲って、その後に為すべきことがある。それが即ち社会・公衆のために奉仕することである」と述べている。三井報恩会や東京ロータリークラブの設立は、彼のこの信念実現の機会となった。前者については、医療・福祉・農村振興・学術教育の分野の事業決定、運営、助成に傾注した。特筆したいのは、社会の片隅に隔離されて、差別や人権無視に苦しむハンセン病患者に寄り添う米山の姿勢である。松丘保養園の元患者故滝田十和男氏の手記には「とてもにこやかで、児童たちにもやさしい眼差しを注がれたことを遠い記憶の中で思い出される」と米山の印象が記されている。北は青森から南は宮古島まである14の国立療養所のすべてを病身を押してまで慰問・視察に訪れている。その際は、必ずポケットマネーから手土産持参だったという。最後の訪問先は群馬の栗生楽泉園。肩の荷をおろして、草津の温泉にゆったりとつかりながら米山の脳裏を去来するものはなんだったのだろうか。

青森RCとバナー交換

一泊二日の駆け足ではあったが、今回の旅は参加者の受け止めに温度差はあるにせよ、それぞれにインパクトを与えたことは間違いない。氷山の一角ではあるにせよ、米山梅吉その人の事績を自分の目で見、肌で感じ、その人物を身近に思えた意義は大きい。参加者一同はたくさんの方々のご協力に感謝しつつ、ロータリアンたることの誇りと喜びを胸に、明日からの活動意欲をかきたてられながら、家路についた。

［参考資料］
谷内宏文『点描　米山梅吉』（新風舎）
米山翁記念誌委員会『米山梅吉翁と青森県』
（青森市内4ロータリークラブ）
内藤成雄『藍壺先生という人』（財団法人 米山梅吉記念館）
木村義正『RYLAセミナー報告書』
（国際ロータリー第2830地区RYLA委員会）
川西健登『甲田の裾』2017年2・3号（松丘保養園松桜会）
他

［協　　力］
国立療養所松丘保養園・青森ロータリークラブ
青森県平内町・米山梅吉記念館

米山梅吉の著作を じかに読むシリーズ その2

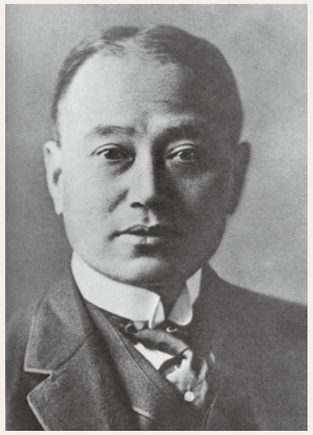
「銀行の取引台を顧みて…苦き経験」

今回の著作は、銀行行餘録として明治30年から大正14年の30年間の回顧録として「業余の片々たる漫語録と看れば即ち可なり」という思いで稿を起こし、昭和2年に出版されました。有名な「新隠居論」もここに載っています。

今回は「銀行の取引台を顧みて」から「苦き経験」を掲載します。

『銀行行餘録』より
「銀行の取引台を顧みて・・・苦き経験」　米山梅吉　著

始めて銀行取引台の後に立てる時の其一種異様の感は、入て銀行員となれるもの忘るゝ能はざる第一の印象にして亦苦き経験なるべし。今日に在ては独り銀行と云はず各種の商事会社には、多くは取引台を設けて其事務室と客席と内外を区別し、普通の場合には立ながらにして応対取引を迅速にするを便として聊も怪む所なく、使用人の此責任ある持場に置かるゝは、其才能用るに足るの証拠として寧ろ満足すべき理由ありとせらるゝも、今より三十年の前に於ては、郵便電信局又は鉄道の切符発売所の外には独り銀行に取引窓の設けありしのみなるを以て、始めて其所に働くの人となりし時、聊か紳士の自尊心を傷けられたるが如き感なきを得ざるべし。（註：自尊心を傷つけられた思いがした。）


57歳当時の米山梅吉

著者は銀行に入ると共に直に貸付係の一員たりき、出納又は計算係の事務は熟練なきものには容易ならざるのみならず、寧ろ其の余りに器械的にして具つは平凡なるがため、自ら抱持する所ある者の之に赴くを快とせざるの部門たり。

新人の著者が始より貸付係に入りしを以て僥倖なりとせるものありしは所以なきに非ざりき。

然かも著者は固より取引の加減を解せず信用の如何を知らず、銀行業務の規律と習慣に於て予備知識なく全くの門外漢たり、貸付業務の皮相をさへ知るの理なく況して其内容に関する如きは此に過るの難事なしとせり。

先ず其の担任せるは貸付割引残高帳の記帳なり、簿記の事を知らざりし著者には、其複式法により貸借の数字が両者の総計に於て相合するの事実さへ已に不可思議なり、而して同輩の指頭が算盤の上に旋転して無限の数字が瞬間に計上せらるゝは驚異とせざるべからず。「ペン」を以て邦字を書するは著者の前より慣れたる所なれども、之を横しまに記して頗る妙致あり而して数字の罫線上に井然として体をなすが如きに至ては、遽に企及ぶべきにあらず、計数を加ふると減ずるとは辛うじて之を能くせるも、進んで利息の計算はなすに当ては、同輩の算盤を弾じつゝある間に、著者は鉛筆を削って紙片に乗除を試むるなりき。

明治35年 日本橋駿河町に竣工した三井本館※

然も斯の如くにして幸に其任務を果たすを得、同輩の精査を請て多く過なきを得たりと雖ども、今より顧れば背に汗するものなくんばあらず。

然而して当時に於て貸付割引の一口万位を以て記さるゝものは尚ほ寥々として晨星の如く、銀行集会所及び手形交換所は、頻に現金の収支を減少し信用取引を増進せんため種々の方法を講じ小切手手形の流通を奨励したれども、其取扱高は比較的僅少のものにして、大銀行と雖も未だ固より今日の資力を備へず盛に日本銀行に再割引を求むる傾なりしかば、所謂真個の商業手形なるものは極めて尠なく、多くは融通手形の然かも其性質及金額等より視て当事者間の所謂書合に過ぎざるが如きもの比々として、其担保附の種類も亦た限ありしこと論なし。

商業手形を尊重し商工業の発展に伴ひ歳月と共に次第に之れが増加を見たりと雖も、一時之を奨励し驩迎するに専らにして所謂融通手形の通用を視ること蛇蝎の如く、後年信用の発達し、欧米銀行に在ても取引先によりては常に「アッコモデーション・ビル」を融通の具と為すと云ふの事実を知り、其の反て薄弱なる所謂商業手形に勝り、大額取引の寧ろ単名手形の割引に依るを便として怪まざるの今日に至れるもの、畢竟銀行業務の一進歩たれども、其の此に至るには長き間の変遷を要せるなり。

初め駿河町に在りし三井銀行の営業所は、当年の奇観たりし兜町の第一銀行と好一対の建築にして、著者の始めて故中上川氏に見えたるはこの中に於てなりしが、其の入行せる時は既に新右衛門町の仮営業所に移転し、駿河町には新築の計画ありて三井の歴史を語れる旧建物は之が取壊に着手されつゝありき。

僅かに運河を隔てゝ阪本町には同じく三井物産会社の仮営業所ありて益田男爵、故上田安三郎氏等此に在り、三井鉱山会社は駿河町の一方に残りて団琢磨氏三池をいでゝ之を宰し、三井工業部は彼の暖簾掛の呉服店の中に故朝吹英二氏之を幹し高橋義雄氏も此に在り、故木村正幹氏及び馬越恭平氏等は已に去て外に在り、故西村虎四郎は閑地に就き時に其姿を示せるに過ぎざりき。

斯くて著者は銀行の貸付係に在りしが、此部は殆ど支配人の直轄に属せしため貸付の事以外に種々の機務触るゝを得たり。当時波多野承五郎氏営業部長たりしが幾もなく重役に昇任し、後任として上柳清助氏大阪支店長より転じ来れり、著者は上柳氏の支店検査に随伴し、生れて始めて日本のマンチェスターたりシカゴたりと云う大阪に出張してその景況を知るの機会を得たるなりき。

表紙と本文

明治30年前後の営業案内

米山梅吉記念館

記念館の歴史

—黎明の頃から
旧記念館建設とその運営—

建設経緯①

米山梅吉記念館は本年創立から50年を迎えます。この50年を記念し、昨年秋発行の館報から本年秋号までの3回にわたり、記念館の歴史について記しています。平成17年に記念館の創立35周年を記念し、米山梅吉記念館の元常務理事で弁護士の井口賢明氏（沼津北RC）の手により出版された『超我の人 米山梅吉の跫音（あしおと）』の第3編 財団法人米山梅吉記念館の歴史より原稿を引用しご紹介させていただきます。尚、紙面の制約上一部抜粋・要約しております。

第2章 旧記念館の建設とその後の運営

4.月桂樹

理事長の松井は、ポール・ハリスが帝国ホテルの庭に植えた月桂樹（二世）をこの記念館に確保したくて仕方がなかった。八方手を尽くして、これがようやく昭和49年5月18日に実現した。塩原禎三（米山記念奨学会専務理事　東京）、玉川一郎（東京江東）ら第358地区米山奨学事業推進委員会の面々11名他は、この日の朝、東京からマイクロバスで東名高速道路を記念館に向かった。

途中、大井松田の第一生命に立寄ることを忘れなかった。塩原は、玉川と連れだって、かねて打合せのとおり、事務室で鉢植えの月桂樹を受け取った。そしてまた、東名高速道路を西に向かった。記念館では、理事長の松井と理事の瀬川が出迎えた。

このとき月桂樹の大きさは、50cmほどであった。これは、記念館の敷地、長屋門の西側の桜の木の下に植えられた。

この月桂樹の由来である。昭和10年2月9日、ポール・ハリスは、帝国ホテルの庭に1本の月桂樹を植えた。これは、戦争中の厳しい条件のなかをなんとか生き延びていた。

ところが、昭和42年、帝国ホテルが改築された際、庭の木はすべて撤去されることになった。帝国ホテルの社外重役でもあった第一生命の社長矢野一郎（東京）がこの月桂樹をもらいうけた。大井本社の敷地に移植、多くを挿し木にし、丹精して育てた。ただ親木は、病虫害で弱っていて、植え替えに耐えられなかった。挿し木にした200ないし300本のうち、8本が根をつけた（東京ロータリークラブ『月桂樹』）。この2世の探索記事によれば、最初の1本が記念館のものである。他に、小田原市の二宮尊徳記念館に、2本が東京クラブに渡され、うち1本が帝国ホテル、1本が東京北の丸公園に生育しているという。そして、2本はそのまま第一生命に残されているようである。

また、もとの親木は、枯れてしまい、それで木槌やペーパーナイフ、茶杓が作られた。（注：現在この月桂樹2世から平成28年に三島ロータリークラブの千年の夢・千年の樹委員会により月桂樹3世が育成されたものを贈呈頂き、月桂樹2世の横に植樹されています）

二世

三世とポール・ハリス
植樹碑

5.土地の取得

昭和54年11月17日、米山の嗣子米山桂三が亡くなった。まだ73歳という年令であった。米山は、自身の蓄財ということには興味を示さなかった。その子供である桂三もそうであったろうし、家族もそのような雰囲気をうけついたのであろう。翌昭和55年になって、米山桂三の遺族により、記念館敷地およびこれに隣接する土地全部の譲渡の申し出があった。

遺族からの申し出は、記念館建設のため当初借り受けた土地150坪を財団法人である記念館に寄附する。これに接続する843.45坪の土地について、買い受けをということであった。単価は坪（3.3㎡）当たり10万円で代金総額では8434万5000円となる。

当時の記念館の総資産は3500万円ほどであった。しかし、3分の1は建物、構築物である。収入は昭和50年度で325万円、昭和51年度で247万円、昭和52年度で409万円、昭和53年度で342万円である。その内訳は、基本財産の運用益と利息などで100万円から150万円、後は寄附による収入である。寄附によるものも、第259地区、第262地区から拠出して貰っているものが見通せるだけで、その他の寄附は不確定である。しかも、固定的な経費や修理費などの経費を考えれば、多くの剰余を見込めないのは明らかである。

このような状況下で、8500万円もの土地代を拠出しようというのである。これを決断するには、全国ロータリアンに頼るしかない。その10年前とはいえ、前回は、2000万円という目標であった。今度は8500万円という金額である。設立当初のものとは規模が違う。しかし、いわば千載一遇の機会ともいうべきこの時に、これを取得するのでなければ、記念館の将来はないと考えなければならない。結論的にこれを取得することとなったのであるが、大変な決断を要したであろう。いま振り返ってみて、この蛮勇とも云える決断があって、いまの米山梅吉記念館があることである。現在のわれわれは、先輩のこの重い決断に感謝しなければならない。理事長の松井は、冗談まじりに、資金が集まらなければ、自分が田畑を処分してでもやるさと周囲に漏らしていた。

これについて、昭和55年4月1日、寄附申入れの土地について寄附をうけるとともに、その余について売買契約を締結した。代金8434万5000円の支払は、1000万円については速やかに、残金は3年間で支払う、所有権移転登記は、代金完済のときとするが、半額を支払ったときは所有権移転仮登記をする。というものである。

土地の取得を先行させたものの、募金方法など具体的な内容は詰めてなかった。ここで、この資金の募金をつのる必要があった。

記念館の理事、監事だけでは荷が重い、それで、発起人には、これまで記念館が何かと面倒をみてもらってきたパストガバナー5人も顧問として発起人に加わってもらった。まず、地元第262地区のロータリアンに募金をお願いすることとし、募金活動をはじめた。

これにより第262地区でこの年度中だけで1240万円の募金（その後も合わせて1680万円）があった。さらに全国のロータリアンに募金を呼びかけ、昭和57年度中の募金額は7,440万円に達した。予定のほぼ9割となり、後は通常の寄附でまかなうこととし、ここで終わりとした。昭和57年3月31日までに、不足分を借入金でまかない、全額を支払った。そして、その日、所有権移転登記を得た。

ここで取得した土地は、やがて新記念館への礎となるわけである。

6.米山梅吉児童公園

昭和58年、記念館に隣接する新たに取得した土地に米山梅吉児童公園が設置された。

往時の児童公園

移設の児童公園碑

これは、松井の次の理事長大河原二郎の提案したものである。「米山の人生、最後の仕上げは、小さい子ども達の育成であった。だから、小さいとき育った長泉の子ども達のための事業は、喜んでくれる筈である。」このような考えにより児童公園の建設の計画が進められ、昭和58年9月16日、開園式が行われた。

これは、記念館の新館工事が始まるまで、ちびっ子公園として、この区域の子ども達に憩いの場を提供した。平成9年、記念館の新館が建設されることになり、役目を果たして取り除かれた「米山梅吉児童公園」の標石は、敷地内に移転されてある。

第3章 新しい記念館の建設とその後

昭和44年9月、記念館の建設がなった。たしかにささやかなものである。でもこれに奔走した関係者にとっては、楽しい我が家であった。ところが時が経過し、いたみもひどくなってきた。建物の内外の色が褪せてきた。内容的にも輝きが落ちてきたと思えるようになった。

記念館も認知度が高まり、来訪者が多くなった。米山詣でというキャッチフレーズもあって、平成4年には1000人を、平成6年には2000人を超えるまでになった。米山奨学生の来館も多くなり、彼らがここを訪ねて感想の文章を綴る。素直な意見を述べるにしても、文章となると、みすぼらしいという趣旨の表現はでてこない。思ったよりもとか想像したよりも小さなものであったというような表現になる。これも、それも米山の質素さを示すものであろうという結びになる。でも、会話では率直になる。平成4年8月から常務理事をつとめ、来館する奨学生と多く接する幾多裕男には、みすぼらしいという表現が耳に入ってくる。時代が下った時期では、そのような感じを抱いた人も多くいたのであろう。そして、これではいかんと素直に表明し、新館の建設に奔走することになるのが、第3代目の理事長坂本豊美である。また、平成6年度第2620地区のガバナーで、新館建設について、坂本とともに苦労したのが内藤成雄であった。内藤は、平成7年8月から記念館の理事をつとめ、坂本の後、平成11年8月から理事長となり現在に及んでいる〔注：『超我の人　米山梅吉の跫音』発行の平成17年当時〕

ここでは、新館建設の苦労と建設の状況、その後の運営内容を見てみる。それには、坂本が現に健在であるし、また『藍壺覚書』を残している。同様、内藤は現理事長である。したがって、有する情報の量、質ともにこれを超える者はない。それ故、坂本の『覚書』と内藤の記述によることとする。

1.新館建設への思い

坂本は、記念館創立25周年を契機に新館建設を打ち出す。そして、準備委員会を設立させる。以下は、坂本の『覚書』からの引用である。

◎初めて米山記念館へ

米山梅吉記念館へ初めて行ったのは、私が1984-1985年度の地区ガバナーとして三島ロータリークラブの公式訪問を終えたあとだった。

遠くから見ると、瀟洒な小ぎれいな建物であるが、実際に中に入ってみて、これがという印象を受けた。当時先輩ロータリアン達が、大変なご苦労をされて建設されたことは十分承知していた筈であったが、このままで良いのであろうかという思いが頭をよぎった。建設されてから既に14,5年たっていた。その間近隣の地域では○○記念館とか△△美術館といった立派な建物ができている。それらに比較するとどうしても見劣りがする。

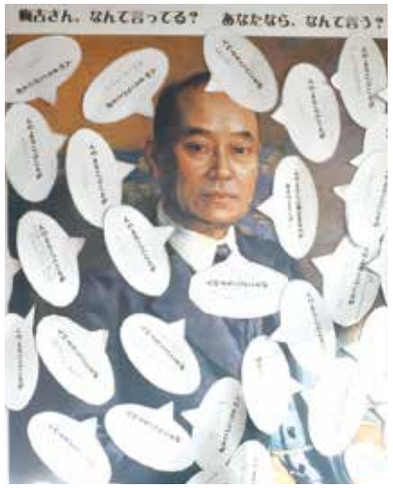
昭和56年頃の記念館

展示室

会議室

『ロータリーの友』に新しくガバナーになった者が、自分の抱負を書く頁が与えられる。（中略）本来ガバナーの頁はその年度のRIの方針に基づいて、考えを述べるべきであるが、このテーマについては既に色々な機会に述べてきているので、私は米山記念館のことを念頭に置いて、「ロータリーの歴史資料館を」と題して一文を書いた。私は「新は深なり」で新しいということは深く研究することで初めて新しいものが生まれるのだ。ロータリーをもっと深く勉強して新生面を開こうと訴えた。ポール・ハリス、米山梅吉をしっかり勉強しようと話した。国際ロータリーは大きな組織で、特に日本のロータリーは東京ロータリークラブを始め各地の代表的人物が会員になっている。そのロータリーの日本における創始者とも言うべき、米山梅吉翁の記念館がこんな状態でいいのだろうかということを痛切に感じたからである。

以下、次号へ



「今日は（2018 年 11 月 17 日）梅吉まつりの行なわれている米山梅吉記念館からお伝えします。現場の鈴木さん、そちらの様子を伝えてください。」

「はい、こちら記念館です。心配されたお天気も晴れて、沢山の方が集まってきています。お昼現在 500 人は超えているでしょうか、お子さん連れが多いようです。みなさん長泉のトクサンジャーが目当てのようです。射的やボールすくい、綿菓子や紙芝居にも人だかりができています。くいしんボーンさんの歌と踊りも愉しそうです。いつもは難しい顔をしているロータリーのおじさん達も、子どもたちの笑顔につられてにこやかです。お話を伺ってみましょう。今日は大盛況ですね」

「お陰さまで、賑わっています。私たちロータリーの例会もこんなに風に明るく行えるといいですね」

「ぜひ、今日のパワーを日々の例会に生かしてください。さて、二階の展示室ではクイズラリーが行なわれています。こちらもたくさんの人です。出題は長泉町内の中学生ボランティアが手伝ってくれています。みなさん最後に紙を持って一階におりていきますね。何をやっているのでしょう」

「梅吉さんは“人のよろこぶ顔をみるのが自分のよろこび”といいました。クイズで梅吉さんについて知ったところで、あなたならなんて言う、を書いてもらっています。」

「なるほど。ではどんな回答が寄せられているか見てみましょう。“人のよろこぶことが**うれしいな**”“人のよろこぶことが**すき**”“人のよろこぶことが**一番大切**”“人のよろこぶことが**わたしもにこにこ**”“人のよろこぶことが**見れるということが生きている理由**”“人のよろこぶことが**げん気のもと**”“人のよろこぶことが**えがおにつながる**”わぁ、いろんな回答がありますね。みなさんだったらなんていいますか？
以上現場からお伝えしました。」